

照井堰と弁慶



【ナレーション】
今から800年以上も昔、一関地方の田んぼや畑に使う水のために、いっしょうけんめい努力した人たちがいました。
それはきっと、こんなお話だったのではないのでしょうか。

照井堰と弁慶



【ナレーション】
ここは藤原秀衛(ふじわらのひでひら)の家来たちが集まって政治をする「柳の御所(ごしょ)」。

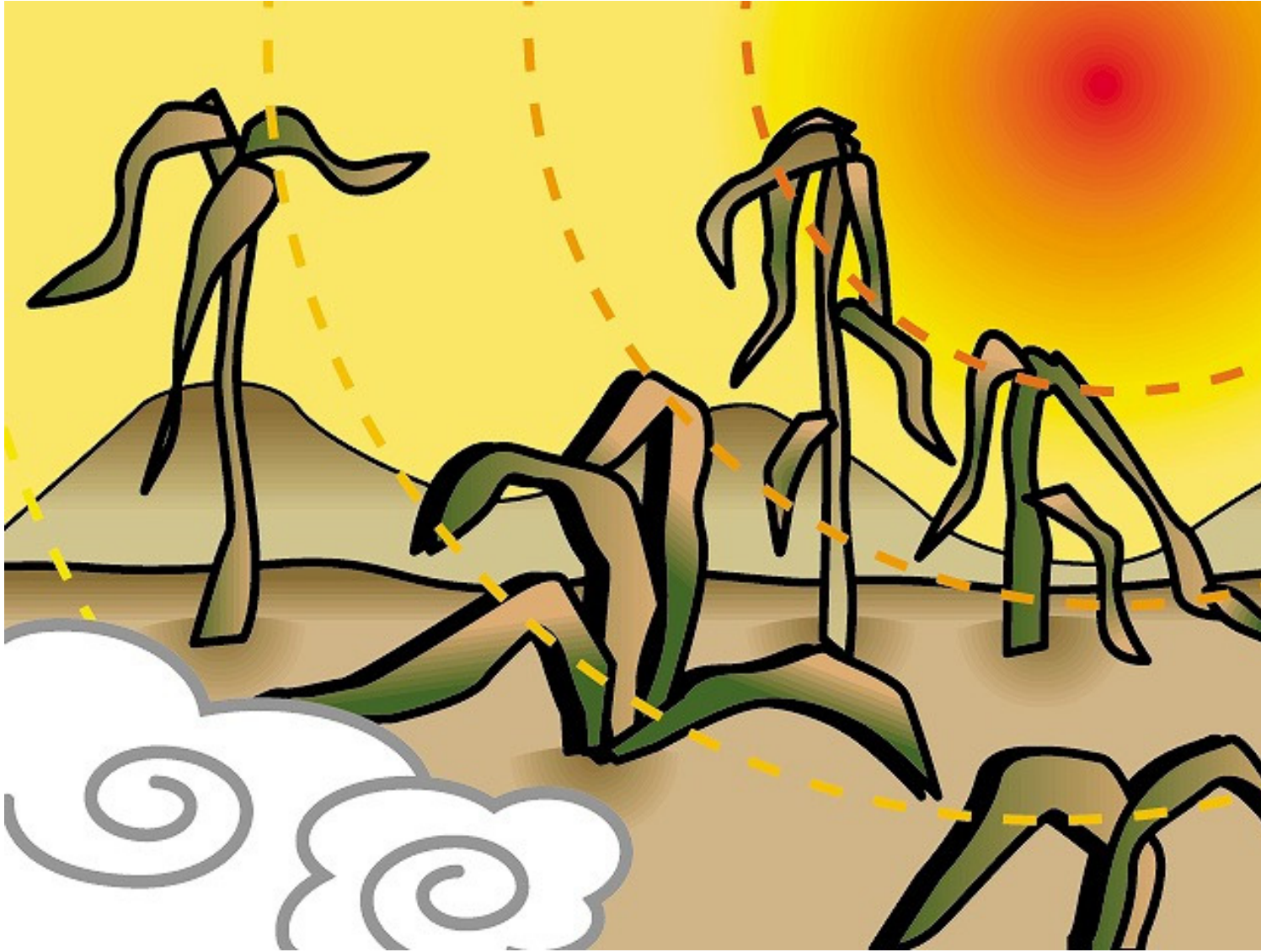
いま、家来たちが困りきった顔で会議をしています。

【家来A】
「長い間、雨がまったく降らないので、稲が枯れそうです。このままでは食べるものがなくなって、人々が生活できません。」

【高春】
「誰か！名案はないものか！」

【家来A・B】
「困った、困った。」

照井堰と弁慶



【ナレーション】

東北地方ではこのところ毎年雨が降らず、田んぼや畑の作物が実らないため、食料不足が心配されていました。

これを「凶作(きょうさく)」とか「飢饉(ききん)」とか言いました。

【高春】

「やはり将来のためにも、水をどうにかしなければいけない。」

照井堰と弁慶



【ナレーション】

それから家来たちは、毎日土地の調査をして歩きました。

【高春】

「磐井(いわい)川の水をなんとか村に引きたいものだ。」

【家来B】

「水さえあったらお米がたくさんとれて、みんなのくらしも楽になる。」

【ナレーション】

そしてついに、太鼓森山(たいこもりやま)と遠矢館山(とあやだてやま)の間に水がたっぷり流れる良い場所を見つけました。

【高春】

「よし！この場所にしよう。

この大きくて大変な仕事が、どうかうまくいきますように。」

【ナレーション】

照井太郎高春は、妻や家来たちと一緒に阿弥陀如来(あみだにょらい)にお願いしました。

照井堰と弁慶



【ナレーション】
工事が始まり、猿鼻(さるばな)という山にさしかかると、工事はなかなか進まなくなりました。

約1キロものトンネルを作るために、「げんのう」と「たがね」で掘り、「もっこ」で担(かつ)いで、土を外に出すのです。

時には大きな岩が落ちてどうすることもできなくなりました。

【村人A・B】

「エーンヤコーラ、エーンヤコーラ」

照井堰と弁慶



【ナレーション】
しかし、あまりのつらさに逃げ出してしまう人や、ケガをする人もたくさん出ました。

【高春】
「このままでは工事がたちゆかなくなる。
本当に完成できるのだろうか。」

【ナレーション】
高春は心配になりましたが、

【高春】
「いや、みんなのためにやいとげなくては。」

【ナレーション】
村人たちとともに頑張りました。

照井堰と弁慶



【ナレーション】
ある日、高春は源義経と弁慶、その家来たちが住む高館(たかだて)へ迎えに行きました。

達谷(たっこく)の産(いわや)の前を通ると、瓜畑にたくさん実がなっています。

弁慶は瓜が大好きでした。

【弁慶】
「どれどれ、少しいただくとするか。
うーん、ほっぺたが落ちそうなほどおいしい瓜じゃ。
どれ、こっちの瓜もいただこう。」

【ナレーション】
弁慶はとなりの畑の瓜も、かじりました。

照井堰と弁慶



【弁慶】
「うわっ！ ペっペっ、これはまずい！」

【高春】
「ハッ、ハッ、ハッ(笑)
弁慶どの、それは瓜ではなくてヒョウタンですぞ。」

【弁慶】
「ええい、このヒョウタンめ。
同じ形でまぎらわしい！」

【ナレーション】
ヒョウタンの真ん中をギュッと握りました。
今のヒョウタンの形がユニークなのは、それからだと言われている。

照井堰と弁慶



【ナレーション】
さて、工事は3年もの月日をかけて、ようやく最初の用水路が出来上がりました。

いよいよ水を取り入れる日、たくさんを見物客が、かたず固唾をのんで見守っています。

【村人A】
「わざわざ秀衛さまがごさ来てたじゃ。」

【村人B】
「義経さまと弁慶さま。家来衆(けらいしゅう)と毛越寺(もうつうじ)のえらいお坊様たちもだじゃ。」

照井堰と弁慶



【ナレーション】
ガタン！ドドーッ！
扉が開かれたとたん、水は勢いよく流れ込み、村の田畑を潤しました。

【村人】
「水だー！水が来たぞー！」

【ナレーション】
藤原秀衡は高春を呼んでほめたたえました。

【秀衡】
「よくぞやってくれた。
これで米も沢山とれようぞ。
この堰は、お前の名をとって照井堰と名付けるがよい。」

【ナレーション】
今までの苦勞や、工事の事故でケガをしたい亡くなった人たちのことを思い、高春の頼には、とめどなく感謝の涙が流れました。

【高春】
「みんな、とうとうやったぞ！ありがとう！」

【ナレーション】
こうして出来た照井堰には今でも豊かに水が流れて、人々の生活をささえているのです。

おしまい